

子どもを守った猩々－疱瘡除けの人形－

草津宿街道交流館の1階に展示してある、丸く編んだ藁（わら きんだわら）の上に乗った赤い張子人形（はりこ）をご存じでしょうか。

このような人形は、古くは草津で作られ、製作元が県外に移った後も昭和30年ごろまで使われていた疱瘡除けの人形です。藁の上に赤い紙が敷かれ、赤い頭髪を持つ中国の想像上の動物「猩々」（しょうじょう）とダルマ、カワラケが乗っています。猩々は酒樽の上に乗る、右手に柄杓（ひしやく）と左手に盃（はち）を持っています。

ところで疱瘡とは天然痘ともいい、天然痘ウイルスを病原体とする感染症の一つで、現在では撲滅が確認され、そのワクチンの接種（しゅつじょう）（種痘ともいいます）も行なわれてはいませんが、種痘が普及するまでは命にかかわる病気であるため、子どもを持つ親にとっては恐ろしいものでした。

医学が発達していない時代、この病気は疱瘡神（ほうそうがみ）という悪神のしわざと考えられていたので、疱瘡神が寄り付かないよう疱瘡神が嫌うものを子どもに持たせたり、祀（まつ）ったりしました。疱瘡神が嫌うもの、それは「赤色をしたもの」でした。予防として赤い人形や玩具を持たせ、疱瘡にかかったら症状が軽くすむよう、すぐに猩々やダルマを祀り、服を赤いものに替えたりしました。種痘が普及した後もこの風習は残り、種痘をした日にこれらの人形を祀り、疱瘡除けの祈願をしたといわれます。そして、人形は数日後に集落の外れの四辻に捨てたり、川に流し疱瘡送り（ほうそうおく）をしました。

